

令和6年 11月 22日

第 63 号

鳥取県栽培漁業センター

(公財)鳥取県栽培漁業協会

昭和 61 年創刊時の復刻デザイン

栽培漁業協会生産中のツルアラメの造成

異常気象という言葉をよく聞くようになりましたが、これも「地球温暖化」の影響でしょうか。今年も4月から大変暑い日が続いたのも記憶に新しいところです。この「地球温暖化」は海水温の上昇にも影響しており、日本各地で様々な弊害が確認されています。そして、鳥取県の沿岸でも海水温の上昇は確認されており、その影響の一つとして、海藻が無くなる「磯焼け」傾向になった地域が増えています。「磯焼け」の原因は様々です。例えば、夏場の高水温による海藻自体の枯死や冬場の水温が高いことでムラサキウニの摂餌圧が下がらず、これまで秋から春に芽吹いていた海藻を食べてしまうなどの原因が考えられます。

ウニの対策としては、一定の区画を決めてウニを集中的に駆除し、密度を下げ、海藻を増やす試みを行っています。この試みによって海藻が増えている場所が増えています。また、夏場の高水温によって海藻が枯れてしまった所には、アラメなど海藻を新たに植えています。以前のような広がりが見られない地区も見られます。そこで、鳥取県栽培漁業協会では県の委託を受け「ツルアラメ」という新たな海藻を生産し、増殖を試みています。この海藻は、県内では境港で自生が確認されており、水深の浅い所から深い所まで生息できます。遊走子という胞子で増えること以外にも、匍匐枝という茎の一種を伸ばすことでも増えます。現在、泊、御来屋及び淀江地区でプレートとロープに種苗を付けて増殖試験を行っています。この中で、ロープ式で行っている淀江地区の状況を紹介します。

令和5年冬に淀江地区平田港に設置し(写真-1)、令和5年夏から秋にかけて高水温の影響か葉が少なくなりました(写真-2)。しかし、令和6年春には葉が再生している状況を確認しました(写真-3)。この様に他の海藻とは異なり匍匐枝でも増える海藻です。夏の高水温に対応できる海藻の一つなのかもしれません。まだまだ、ツルアラメの増殖には設置場所、設置方法など検討する課題も多いですが、沿岸の海藻を増やすためには漁業者の御協力が不可欠です。今後ともご協力をよろしくお願いいたします。(栽培漁業協会 井上)



写真-1



写真-2



写真-3

鳥取の元気な養殖業者たち Season II

少子高齢化が進む中、水産業でも次世代の担い手確保が重要な課題だと言われていますが、3K（キツイ、きたない、危険）のイメージもあり、企業は人材確保に苦戦しています。

そうした状況の中、企業は若手従業員に働きやすい環境を整備したり、責任あるポストに任命して経験を積ませたりと、仕事のやりがいを感じてもらうための取り組みに力を入れています。そんな企業の期待に応えるべく日々の業務に励んでいる若手従業員の姿を紹介します。

青山 仁志さん(32歳)
(弓ヶ浜水産(株) 養殖部養殖課)
淡水チーム係長)



いつも爽やかな笑顔が印象的な青山さん。取材に伺ったこの日も、船上山の飼育現場でギンザケの稚魚の飼育管理のため、一生懸命汗を流されていた。青山さんは就職して9年目、これまで会社の内水面養魚場で、境港サーモンとなるギンザケの親魚の飼育管理、発眼卵の孵化管理、稚魚の飼育管理等の担当を経て、養殖課の淡水チーム係長に抜擢された若手のホープだ。毎日、境港の本社に出社した後、すぐに船上山、本宮、福原川等の県内各地の内水面養魚場に足を運び、現場での異常の有無や適切な飼育管理がされているか、チェ

ックに余念がない。

弓ヶ浜水産(株)は、平成27年に福原川養魚場が始動、平成28年には清水川養魚場が始動し、現在、延べ200万粒もの発眼卵の収容が可能となった。境港サーモンの水揚げアップのための積極的な設備投資だが、「立派な設備が整備されても、突発的なトラブルや魚病による斃死が発生することがあるし、それらに対応するためには飼育メンバー一人一人が養殖衛生管理の意識を高く持つことが重要だと考えています。毎日魚の様子を観察することで気づくことも多いし、こうした意識の醸成と日々の積み重ねが大切だと気付かされます」と、凜とした表情で語ってくれた。

そんな多忙な日々を送る青山さんには、バトミントン、車、蝶の鑑賞など多彩な趣味がある。体を動かすことが好きで、社会人になってからもバトミントンの練習には定期的に通い、最近では家族と一緒にキャンプによく出かけているという。ワークライフバランスのよい充実した生活を送ることが出来ているのは、「緑豊かな職場で気持ちよく働けることと、今のメンバーがアットのこと」と職場環境や仲間たちへの感謝の気持ちを口にする。日々、技を磨き、優秀な仕事仲間にも慕われる若手リーダーは、今後、養殖業界に新たな3K「清く、価値ある、かつこい」の風を呼び込むかもしれない。(栽培漁業センター 大里)

“ウニ集中駆除マニュアル”を作成しています！

鳥取県の沿岸では平成 27 年ごろから、ムラサキウニによって海藻が食い荒らされる被害が見られるようになりました。令和 4 年 4 月から 6 月に当センターが行ったムラサキウニの分布密度調査では、最大で 1 m²あたり 55 個体ものムラサキウニが確認しました。藻場の減少をくい止めるため、令和 4 年 4 月から 2 年間、県内各地において漁業者とボランティアダイバーによるムラサキウニの集中駆除が行われました。駆除から半年後に現場を調査した結果、23 地点中 18 地点でウニの生息密度が低下していることが分かりました。(写真 1, 図 1)

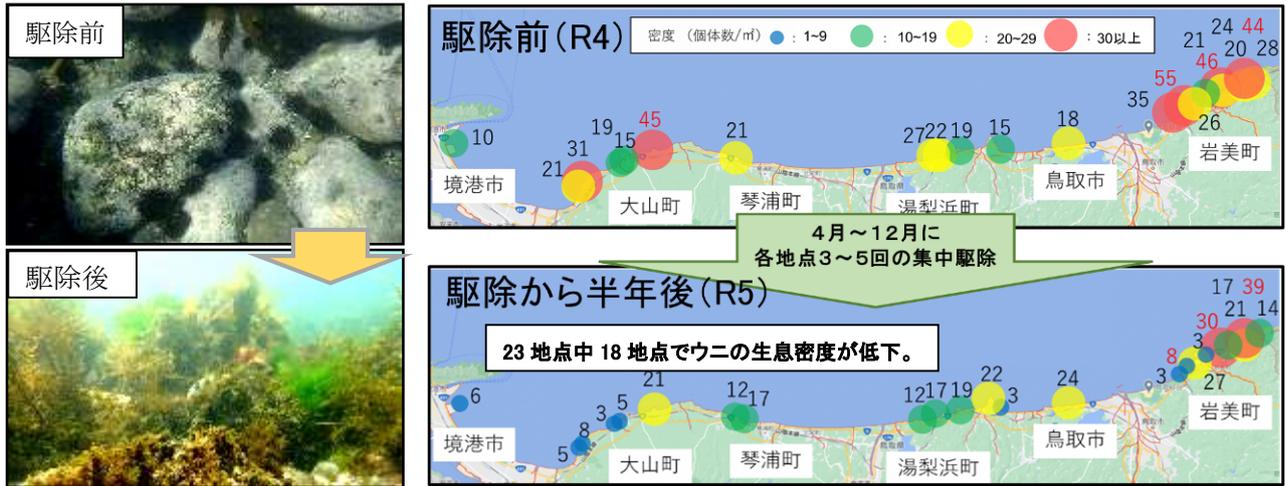


写真 1. 駆除前と駆除後の変化(中山) 図 1. 駆除前(上)の駆除後(下)のムラサキウニの平均分布密度 (個体/m²)

さらに駆除後の調査から見てきたのは海藻の回復力の高さです。下の写真 2 はボランティアダイバー数名がウニ駆除をした地点ですが、駆除後は海藻が 5 倍に増加し、その変化は一目瞭然です。しかし、駆除した全地点でこのような成果が出ているわけではなく、場所によって駆除の効果には差が出ています。当センターでは駆除効果があった地点の共通点をまとめ、ウニ駆除マニュアルを作成し、配布することを予定しています。今後の展開としては、駆除後に海藻用増殖プレートで種苗を移植することや、ウニ駆除により増殖した藻場へのアワビ・サザエの放流等に積極的に取り組んでいきたいと考えています。漁業者、ダイバー、その他関係者の方々皆さんで協力して鳥取県の藻場をウニから守っていきましょう！

(栽培漁業センター 武坂)

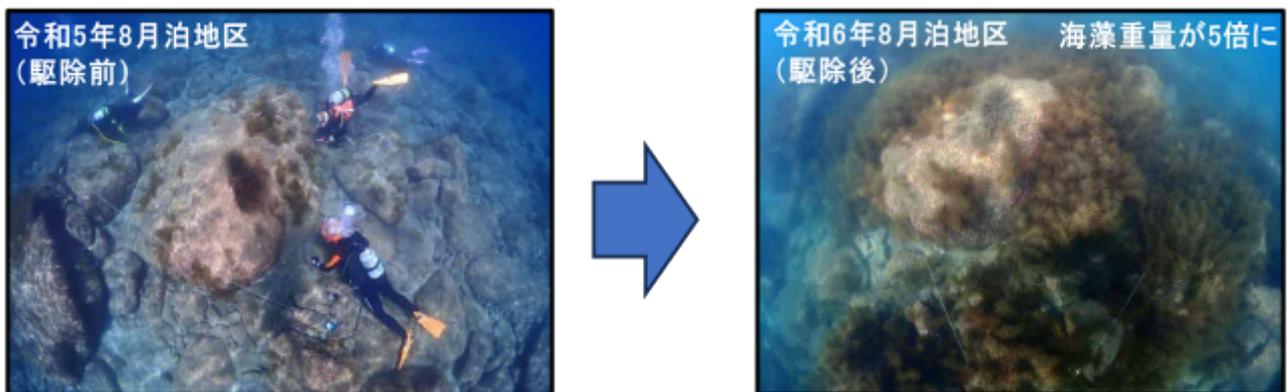


写真 2 ボランティアダイバーによるウニ駆除の成果

【令和5年度 着任者紹介】

栽培漁業センター 養殖・漁場環境室
松田 成史

令和5年4月に県庁漁業調整課から栽培漁業センター養殖・漁場環境室に着任した松田成史（まつだ なるふみ）と申します。

県庁では水産振興担当を4年間、漁業調整担当を3年間させていただき、皆様には大変お世話になりました。

今回、栽培漁業センターの勤務は7年ぶりとなります。業務の中心は養殖関係で、鳥取県の養殖業の発展に貢献できるよう頑張ります。また、港内養殖などを通じて漁業者の皆様とも接点を多く持ちたいと思っていますのでよろしく願いいたします。

栽培漁業センター 増殖推進室 主任研究員
田中 秀一

令和5年4月に水産振興課から異動してきた田中秀一（たなか しゅういち）と申します。

県庁では主に内水面関係の業務を担当し、栽培漁業センターでも引き続きアユ・ヤマトシジミを受け持っているのですが、なかなか沿岸漁業者の皆様と仕事でお会いする機会はないかもしれないですが、どうぞよろしく願いいたします。アユやシジミにご興味をお持ちの方はお声がけしていただけると幸いです。

栽培漁業センター 養殖・漁場環境室 研究員
徳安 理敬

令和5年度に栽培漁業センター養殖・漁場環境室に配属となりました徳安理敬（とくや す みちひろ）です。水産課、水産試験場の勤務経験を経て、この度当センターにて主にサケ・マス試験研究を担当することになりました。水産課では主に補助金業務、水産試験場では浮魚の資源管理業務の担当だったこともあり、今回のサケ・マス試験研究業務は新鮮な気持ちで、毎日が新たな発見・気づきの連続です。当センターでは経験豊富な先輩方が多く在籍しており、日々発生する様々な課題に迅速かつ丁寧に対応する姿に大きな刺激を受けています。自分もこうした一人前のプレイヤーになれるよう、日々頑張っていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

栽培漁業センター 試験船おしどり 船長
山本 徳義

令和5年4月の人事異動で栽培漁業センター調査船「おしどり」の船長として配属された山本徳義（やまもと のりよし）です。以前は漁業取締船「はやぶさ」、試験船「第一鳥取丸」に乗船していました。沿岸漁業の調査船は初めての勤務となりますが、地元が島根半島で育ち、小さい頃から魚釣りやあわび、さざえ、うに、海藻等の磯根資源について興味がありました。

近年の藻場減少による磯焼けや漁獲量の減少など漁業者は厳しい環境ですが、2隻の調査船を活用し鳥取県沿岸漁業の発展に貢献するよう取り組んでいきたいと考えていますので、どうぞよろしく願いいたします。

【令和6年度 着任者紹介】

栽培漁業センター 所長

丹下 菜穂子

令和6年4月1日付で栽培漁業センター所長を拝命しました、丹下菜穂子(たんげ なほこ)と申します。当センターでの勤務はこれで3回目となり、行政、研究機関の経験年数はほぼ同じ長さになりました。これまでセンターでは、主に魚病検査やその対策、養殖場の巡回指導及びギンザケの養殖技術に係る研究に取り組んできました。これからは、当センター業務の根幹である栽培漁業や沿岸・内水面漁業に係る研究課題についても漁業や養殖業現場の皆様へ寄り添って考えていきたいと思っております。

自然界では年々温暖化が進み、海や川の資源状況も様々な要因が絡み合って予測しづらいものに変化しており、漁業や養殖業にも効率化、スマート化が求められています。新しい局面に柔軟に対応しながら、種苗生産や放流とともに沿岸・内水面資源の維持・回復、養殖生産の安定化と増大を図るため、現状に沿った試験研究に取り組み、漁業者や養殖業者の皆様の求めに応じた新しい情報や技術を数多く提供できるよう職員一丸となって努力して参りたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

栽培漁業センター 増殖推進室 室長

志村 健

令和6年4月に境港水産事務所より着任しました栽培漁業センター増殖推進室長の志村健(しむら つよし)と申します。

栽培漁業センターでの勤務は今回初めてとなります。趣味は魚釣り(シーバス、シロイカ、近海ボートジギング)です。私の担当業務は沿岸漁業の資源に関する調査研究です。資源管理や種苗放流による増殖施策を行う際には、事前にその資源の生態情報や海洋環境との関係を整理しておく必要があり、今後の鳥取県の沿岸漁業を好ましい状態にしていくことが大切です。一番大事なことは、毎日のように漁場や魚を観察している漁業者の皆様から聞く情報と調査で得られた情報とが合っているか確認し、納得していただける説明をすることだと思います。沿岸漁業振興に役立つ情報を提供していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

栽培漁業協会 技師

松本 貴裕

令和6年4月から鳥取県栽培漁業協会にて水産技師として採用になりました松本貴裕(まつもと たかひろ)と申します。現在は、副査としてアワビを担当しています。

令和5年10月から鳥取県栽培漁業協会にて非常勤職員として採用され、アワビの種苗生産の補助を担当してきました。飼育業務を通じて、一生懸命に餌を探し食べる仕草、放卵・放精を実際に見て興味を持ちました。私は専門的な知識を身に付け、幅広い業務をこなす、少しでも資源量を増やしていきたいと思い、水産技師を目指しました。

何事も初めてばかりで、ご迷惑をおかけするかもしれませんが、来年からはアワビの主査としての任務を全うできるよう精一杯精進していきますのでどうぞよろしくお願いいたします。